

# 就労的活動が認知症の人の 精神的健康に与える影響とその背景要因の調査 —多施設共同横断比較研究—

加茂 永梨佳 ●神戸大学 大学院保健学研究科 博士課程 後期課程



認知症の人が就労的活動に参加する実践例

## 1. 背景と目的

高齢期の精神的健康の維持は、介護予防や健康寿命延伸に直結し、ひいては在宅ケアにおける介護者負担を軽減することにもつながる。認知症の人の精神的健康を維持向上させる非薬物療法として、「他者との交流」や「意味のある貢献・社会的貢献」「運動」等が有効とされる。これらの要素を併せ持つ就労的活動は、認知症の人の精神的健康の維持向上に寄与する可能性がある。就労的活動とは、役割がある形での社会参加で、通所介護等の利用者が職員の見守りのもと行う有償・無償のボランティア活動である。認知症の人の中には「社会とつながり、役に立ちたい」と希望する人がおり、これらの現場の要請に応じる形で、介護保険下で認知症の人を含む要介護高齢者が就労的活動に参加することが条件付きで認められた。

このような認知症の人ができることを活かして社会貢献する取り組みは、認知症の人の社会参加のあり方を根本から変える可

能性を秘めている。しかし、就労活動の効果は経験的実感に留まっており、就労的活動が認知症の人の精神的健康に与える効果や、効果に影響を及ぼす要因などの精査はこれまで十分に進んでいなかった。

そこで本研究では、「就労的活動が認知症の人の精神的健康に与える効果」と「効果に影響する活動の質的要因」を明らかにする。

## 2. 取り組みの方法

**研究デザイン：**多施設共同の横断比較研究

**対象：**通所介護を利用する者のうち、認知症（軽度認知障害を含む）の診断を受けた者とする。対象者数は、サンプルサイズ設計により、就労的活動への参加あり群・なし群の各群40名とする。

**データ収集・分析：**2群間の性別、年齢層、認知症重症度等でマッチングし、精神的健康の差を統計学的に比較する。精神的健康の評価は、WHO-5精神的健康状態表を使用する。さらに、就労的活動の質を、Assessment of quality of activitiesを用いて定量化し、精神的健康の高さに影響する要因を統計学的に探索する。

## 3. 期待される成果

直接的には、認知症の人に対する就労的活動の精神的健康への効果と適応に関する定量的なエビデンスが創出されることが期待できる。また波及効果として、認知症の人の精神的健康が保たれることのみならず、介護者負担が軽減することも期待され、持続的で質の高い地域包括ケアシステムの推進に寄与できうる。